

おいしいれ

昭和五三年度 一年 男児

「えーん、えーん。」

ともだちを なかせたのは、きょうで 三かい目。

「また、ともだちを なかせて。おいしいれで かんがえなさい。」

おかあさんは、ぼくの せなかを つかみました。そして、おいしいれに 入れました。

おいしいれの中は まっくらで、うれしいが 出そうでおっかなかったので、ぼくは なきながら、

「だして、だして。」と、おいしいれのを ドシンボタン、ドシンボタンと たたいた。こんな音だから、おいしいれのが、はずれそうになった。おかあさんは、とを しっかり おさえていました。

しばらくすると、ドシンボタンと いていた音は、おさまりました。ぼくは、あきらめて おとなしくして いました。

また、しばらくすると、おかあさんが、「こんど、

ともだちを なかせねが。」

「はい。」

「したば、ともだちの いさいて、あやまて きなさい。」と、いって、おいしいれから だしてくれました。

ゆっくりして、おかあさんの かおを見たら、目になみだが いっぱい あふれて いました。

ぼくは びっくりして、

「どうして おかあさん ないてるの。」とききました。

おかあさんは、

「ちがうの。ないてるんじゃないの。たまねぎを おいていたら、なみだが 出てきたの。」といって、なみだを ふきました。

ぼくは、たまねぎに おかって いました。

「こらっ、たまねぎ。おかあさんを なかせて いいの。おいしいれで かんがえなさい。」

ぼくは そう いって、たまねぎを つかみ、たまねぎをおいしいれに いれました。

おかあさんは、にこにこ わらって いました。